Akita University

知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善†
－共通実践事項の設定とその実践状況の評価を通して－

池田　和馬*・諸岡　美佳**・藤井　慶博***
秋田県立ゆり支援学校*・秋田県立栗田支援学校**・秋田大学教育文化学部***

本研究では，知的障害特別支援学校における振り返りに焦点を当てた授業改善を行い，その成果と課題を明らかにすることを目的とした．対象校で振り返りに焦点を当てた授業改善に向けた４つの共通実践事項を設定し，その実践状況に関し，教員にアンケート調査を行った．

その結果，授業のめあてと振り返りの整合性が図られ，見通しの明確な学習活動が展開されるようになった．また，動画活用と相互評価，学んだことをまとめ確認する取組，次時の目標との関連付けなど児童生徒による振り返りの充実が図られた．課題として，児童生徒が自ら学びを振り返り，学びを次時につなげていく内容や方法の検討や，児童生徒の経験の差や障害特性に応じた振り返りの工夫が挙げられた．今後は，振り返りにおいて設定した個々の実践事項が，児童生徒の学びにどのように効果があったのか，授業実践に基づいた具体的な検討が求められる．

キーワード：知的障害，特別支援学校，振り返り，授業改善

Ⅰ　問題と目的

中央教育審議会（2016）では，「学習評価において教師が指導の改善を図るとともに，児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるためにも重要である」と，児童生徒自身による学習評価の充実が提起された．この提起を授業者側の視点で捉えると，児童生徒に何が身に付いたかを明確にしながら，児童生徒自身が主体的に次の学びや生活に生かすことのできる目標設定と振り返りの在り方を検討し，その充実に向けた授業改善が求められていると言える．

また，2020年度から順次実施されている学習指導要領（2017）では，「生きる力　学びの，その先へ」のテーマのもと，学校で学んだことが，明日，そして将来につながるとともに，変化の激しい予測困難な社会の中で，自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，判断して行動できる生きる力の育成が提起された．この生きる力を育むために，自分の学びを振り返り，次の学びや生活に生かす力を育む授業改善による児童生徒の主体的な学びの実現が求められている．

さらに，特別支援学校学習指導要領解説（2018）では，「児童生徒が自主的に学ぶ態度を育み，学習意欲の向上に資する観点から，各教科等の指導に当たり，児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫する」ことが求められている．

授業における振り返りに関し，太田（2012）は，知的障害特別支援学校において「『振り返り』は，授業の『まとめ』の中で行われてきた．しかし，時間をかけて論議され，論究されてきたわけではない」

2022年１月６日受理
† Kazuma IKEDA*, Mika MOROOKA** and Yoshihiro FUJII***, Study on Reflection of Classes in Special Needs Schools（with Intellectual Disabilities Support）-Through Setting Common Practices Regarding Reflection and Analyzing a Questionnaire Survey of Teachers-
* Akita Prefectural Yuri Support School
** Akita Prefectural Kurita Support School
*** Faculty of Education and Human Studies, Akita University

Akita University

ことを指摘し，その上で「子どもにおいては，授業の初めに『見通し』を立てることが『振り返り』につながり，『学習内容の確実な定着』に結び付くことから，『見通し－学習－振り返り』という学習過程が重要になる」ことを提唱している．

臺（2016）は，振り返り活動の実践研究を通して，「知的障害のある児童に対して，学習の記録を残し，授業のイメージをもたせるなどの指導・支援を行うことは，主体的に学ぶ意欲を高めることに有効である」と指摘している．

これら授業における振り返りの重要性が提起されているものの，知的障害特別支援学校における授業の振り返りに関する実践研究をみると，実践内容は紹介されているものの，それら実践の成果や課題について検討された研究はほとんど見当たらない．

そこで本研究では，知的障害特別支援学校における振り返りに焦点を当てた授業改善とその評価を基に，成果と課題を検討することとした．

Ⅱ　方法

1　実践

2020年度，A県立B特別支援学校では，授業における振り返りの充実のため，4つの共通実践事項（表1）に基づく授業改善を推進した．

1）児童生徒による「振り返り」が可能な「めあて」の提示

これまで授業のめあての多くは「～しよう」というLet's型であったが，児童生徒が評価しやすいように「～は何か？」や「～するためには，どうすればいいか？」などのWhat型，How to型に変更するようにした．例えば，中学部では，保健体育科の跳び箱運動のめあてとして「体重移動するためには，手の位置や動きはどのようにしたらよいだろうか？」とHow to型のめあてにした．また，高等部では，職業科における現場実習の事後学習のめあてとして「実習でもっと頑張れたことは何だろうか？」とWhat型のめあてにした．

表1　共通実践事項

1）児童生徒による「振り返り」が可能な「めあて」の提示
2）「めあて」と「振り返り」のカードの活用
3）「めあて」と「振り返り」の整合性の検討
4）一単位時間の結末及び，単元のまとまりでの「振り返り」内容の設定（表2）

2）「めあて」と「振り返り」のカードの活用

図1は，黒板に貼った「めあて」と「振り返り」のカードである．なお，カードを使用することが目的ではなく，カードを使うことにより，めあてと振り返りを授業に取り入れる機会を設定することを目的とした．

3）「めあて」と「振り返り」の整合性の検討

学部ごとに「授業を見合う会」を設定したり，授業の板書を写真に撮り溜めた「『めあて』『振り返り』一覧」を作成したりしながら，めあてと振り返りの整合性を検討した．

4）一単位時間の結末及び，単元のまとまりでの「振り返り」内容の設定

一単位時間の結末及び，単元のまとまりにおいて振り返りの場面を設定した．具体的な内容については，表2に全校共通及び，各学部で取り組んだ内容に分けて示した．

なお，実践の対象とした授業は，小学部は国語科，

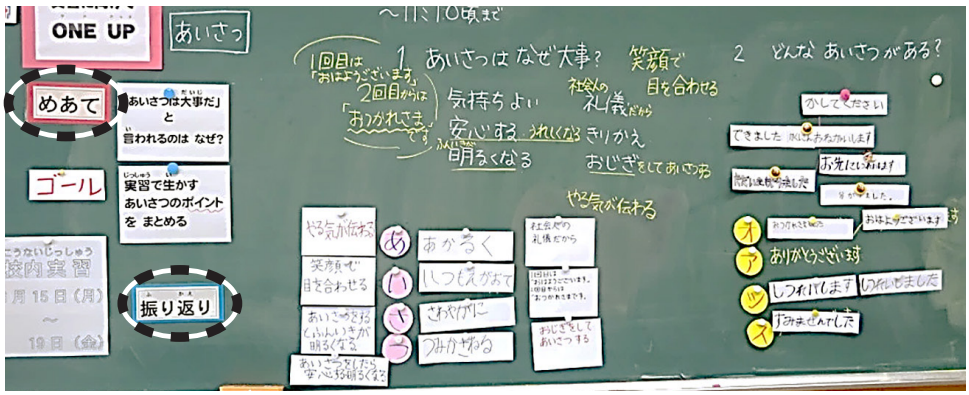

図1　「めあて」，「振り返り」のカード

Akita University

表２「振り返り」において設定した内容

学部	主な内容
全校共通	・感想の記入 ・感想の発表 ・他者評価
小学部	・めあての評価（○，△） ・できたことの再現 ・教師側のまとめ（他者評価） ・評価の動作化
中学部	・動画による学習活動の確認 ・生徒同士のアドバイス（相互評価） ・生徒自身の学習の成果と課題に基づく，次時の目標の設定
高等部	・めあてに対する評価（自己評価） ・評価テスト ・学んだことの集約（板書のまとめ） ・動画による学習活動の確認 ・実演によるテスト（ロールプレイ）

中学部は保健体育科，高等部は職業科，家庭科であった．対象とした授業を各教科にした理由は，これまで各教科等を合わせた指導が教育課程の中心として行われてきた知的障害特別支援学校においても，各教科の指導の充実は，新しい学習指導要領の主旨から今後取り組むべき喫緊の課題であると考えたからである．

2　方法

Ｂ特別支援学校の全教員72名（小学部：23名，中学部：18名，高等部：31名）に対し，授業での評価や振り返りに関するアンケート調査を２回（1回目：2020年４～５月，２回目：2020年12月）実施した．6つの設問項目について，それぞれ「よくしている」（4点），「ときどきしている」（3点），「あまりしていない」（2点），「ほとんどしていない」（1点）の選択肢により回答を求め，平均値を比較した．平均値の比較に当たっては，対応のあるｔ検定を用いた．検定ソフトはSPSSver.24を使用した．統計学的有意はいずれもｐ値が.05未満と定義した．また，２回目のアンケート調査では，授業の振り返りに関し，自由記述による回答も求めた．

Ⅲ　結果

1　設問項目への回答の結果

アンケート調査の回答は，64名（88.9％）から得られ，全て有効回答であった．設問項目への回答の結果を表３に示した．

・全体の１回目に比べ２回目で，すべての項目の平均値が上がった．
・平均値の伸びが大きかった項目の上位３つは，「③日頃から授業のゴールからめあてを設定している」（＋0.61），「①単元（題材）や１単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している」

表３　設問項目への回答結果

設問項目	小学部（n＝21）	中学部（n＝18）	高等部（n＝25）	全体 平均値	全体 増減
①単元（題材）や１単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している	2.65 3.20*	2.88 3.39*	2.77 3.25**	2.77 3.27**	＋0.50
②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている	2.33 3.10*	2.53 2.44	2.38 3.08**	2.41 2.90**	＋0.49
③日頃から授業のゴールからめあてを設定している	3.06 3.30	2.81 3.56**	2.69 3.46**	2.83 3.44**	＋0.61
④児童生徒が学んだことを整理したり，自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している	2.50 2.80	2.53 2.94	2.62 3.04**	2.56 2.94**	＋0.38
⑤活動や振り返りの際に，学習の成果を見取り，価値付たり意味付けたりしている	2.78 3.25	2.65 3.22*	2.88 3.08	2.78 3.18**	＋0.40
⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている	3.29 3.05	3.00 3.39	3.15 3.26	3.15 3.23	＋0.08

※上段は１回目（４～５月）の平均値，下段は２回目（12月）の平均値　　*ｐ＜.05　**ｐ＜.01

Akita University

（＋0.50），「②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている」（＋0.49）の順であった．

・1回目に比べ2回目の平均値の伸びが小幅だったのは，「⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている」（＋0.08）であった．

・2回目の平均値が3.00ポイント未満となったのは，「②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている」と「④児童生徒が学んだことを整理したり，自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している」の2項目であった．

・全体における1回目と2回目の平均値を比較した結果，「⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている」を除き，5つの項目において1回目に比べ，2回目の平均値が有意に高いことが確認された．

2　自由記述の結果

自由記述の回答については，筆者らが協議のうえ内容を要約し，設問項目ごとに分類した（表4）．

①単元（題材）や1単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している

成果として，「様々な方法で評価する機会が増えた」ことや，「教師だけでなく，生徒も振り返りを意識するようになり，振り返りが充実する場面が増えた」ことが挙げられた．また，「生徒の学びたいことを単元計画に盛り込み，教師と一緒に評価することで，生徒の主体的な姿が増えた」ことが挙げられた．さらに，「学んだことを見返し，活用できるファイルを作成した」ということが挙げられた．

課題として，「子どもにとってはめあてと振り返り，教師にとっては目標と評価を一緒に行い，指導

表4　自由記述の結果

設問項目	成果（○）と課題（△）
①単元（題材）や1単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している	○評価する機会の増加（教師） ○児童生徒の振り返りの充実（児童生徒） ○生徒の主体的な姿（児童生徒） ○学習ファイルの作成による学びの活用（児童生徒）
	△児童生徒のめあてと振り返りと，教師の目標と評価を関連させた計画の見直し（教師・児童生徒） △評価の機会の不足（教師）
②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている	○振り返りの内容に関する熟考（教師） ○振り返りの意識の高まりによる子どもの見取りの充実(教師)
	△振り返りのカードの活用不足（教師） △教師主導のまとめと振り返り（教師）
③日頃から授業のゴールからめあてを設定している	○めあての具体化（教師） ○学習活動のめあてを理解する生徒の増加（児童生徒） ○授業構成や板書の充実（教師）
	△めあてと振り返りのそご（教師）
④児童生徒が学んだことを整理したり，自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している	○ICT機器の活用による成果の実感（児童生徒） ○学習プリントを見返す機会の増加（児童生徒） ○学びを他の学習に生かす姿（児童生徒）
	△振り返りの仕方や授業のゴールの検討（教師） △生徒の記憶や記録に残る振り返りの検討（教師）
⑤活動や振り返りの際に，学習の成果を見取り，価値付たり意味付けたりしている	○自己評価の低い生徒に配慮しためあての設定（教師） ○自己評価と他者から称賛される機会（教師）
	△即時評価や具体物による評価の有効性（教師） △児童生徒の思考の見取りと手立ての工夫（教師） △スモールステップの評価規準の設定（教師
⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている	○教科で覚えた言葉や表現の活用（児童生徒） ○学んだことを生かす場面の増加（児童生徒）
	△生徒自身の次の学習への意欲や見通しとのつながり（児童生徒） △生徒の経験の差によるイメージと見通しの不足（教師） △家庭との連携の必要性（教師）

※（教師）は教師側の成果・課題，（児童生徒）は児童生徒側の成果・課題を表す

Akita University

計画を見直していきたい」ということが挙げられた．また，「年間や学期での評価は行っているが，単元や題材のまとまりや１単位時間ごとの振り返りはまだ十分ではない」ことも挙げられた．

②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている

成果として，「振り返りのカードの使用により，教師が以前よりもめあてや振り返りを熟考し工夫した」ことや「振り返りの意識の高まりが子どもの変化に気付き，成果の見取りにつながった」ことが挙げられた．

課題として，振り返りのカードについて「毎回は活用できていない」ことや「時間の確保が難しい」こと，「ワークシートに振り返りを書くようにしているため，カードは使用していない」ことが挙げられた．また，「子どもが主体的にまとめや振り返りをするというよりも教師の主導や誘導になっている」ことが挙げられた．

③日頃から授業のゴールからめあてを設定している

成果として，「ゴールからめあてを考えることにより，めあてが具体的になってきた」ことが挙げられた．また，「学習のゴールを分かりやすく示したことで，その時間に何をすればいいのか理解して臨む生徒が増えた」ことが挙げられた．さらに，「授業の展開や構成を意識したり，板書を工夫したりするようになった」ことが挙げられた．

課題として，「めあてと振り返りの整合性が取れていない」ことが挙げられた．

④児童生徒が学んだことを整理したり，自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している

成果として，「ICT機器を活用し，動画を使った振り返りにより，子ども自身が成果を実感できた」ことが挙げられた．また，生徒が「学習プリントを見返すようになった」ことや「学んだことを作業学習や実習で生かすようになった」ことが挙げられた．

課題として，「即時評価だけで終わらせてしまうことがあるため，振り返りの仕方，授業のゴールを考えていきたい」ということが挙げられた．また，「学んだことが生徒の記憶やワークシートなどの記録に残る振り返りの検討」も挙げられていた．

⑤活動や振り返りの際に，学習の成果を見取り，価値付たり意味付けたりしている

成果として，「自己評価の低い生徒に対しては，難易度を変えてめあてを設定するようにしている」ことが挙げられた．また，「振り返り時，自分の成果を思い出したり，友達からの称賛を喜んだりするよい機会となっている」ことが挙げられた．

課題として，「言葉や文字による板書の振り返りよりも，即時評価や具体物による評価を積み重ねることが有効である」という意見が挙げられた．また，「導入，まとめのどの場面でも児童生徒の思考がどのようにつながっていくのか，教師が子どもの学びを見取り，手立てをすることが必要である」ということが挙げられた．さらに，「自己評価の低い生徒に対してスモールステップの評価規準を設定していく」ことが挙げられた．

⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている

成果として，「教科で覚えた言葉や表現を場面が変わっても活用する姿が増えた」ことが挙げられた．また，「生徒の学んだことや分かったことが別の授業や生活に生きている」ことが挙げられた．

課題として，「授業の締めくくりの際，生徒自身の次の学習への意欲や見通しにつながっていない」ことが挙げられた．また，「学習のつながりを教えるようにしているが，生徒の経験の差により，イメージと見通しを補えていない」ということが挙げられた．さらに，「家庭への汎化を意識したり，家庭と連携したりすることが必要である」ことも挙げられた．

Ⅳ　考察

1　成果

1）振り返りに焦点を当てた共通実践の効果

アンケート調査の結果，選択肢による質問項目のすべてで全体の平均値が伸びていた．また，自由記述からは，振り返りを意識して授業を行うようになったことで，教師は児童生徒の変容や成長に以前よりも注目したり，児童生徒は学習の達成感を実感したり，学んだことを次の学びや他の場面で生かしたりできるようになったことが推察された．これらのことからＢ特別支援学校における振り返りに焦点を当てた共通実践の取組は一定の効果があったと考えた．

2）授業のめあてと振り返りの整合性と見通しの明確な学習活動

「③日頃から授業のゴールからめあてを設定している」の項目は，全体の平均値で＋0.61ポイントの大幅

Akita University

な伸びで3.44ポイントとなった．自由記述の成果からも，授業のゴールからめあてや学習内容をデザインするようになったことや，めあてが具体的になってきたことが挙げられた．また，学習のゴールを分かりやすく示したことで，その時間に何をすればいいのか理解して臨む生徒が増えたことが挙げられた．これらのことから，授業のめあてと振り返りの整合性が図られ，見通しの明確な学習活動が展開されるようになった状況が示唆された．

3）学習を評価する機会の増加と生徒による振り返りの充実

「①単元（題材）や１単位時間毎に一人一人の子どもの成長を評価している」の項目は，全体の平均値で＋0.50ポイントの伸びで3.27ポイントとなった．自由記述にみられるように，様々な方法により学習を評価する機会が増えたことや，教師のみならず児童生徒による振り返りが充実してきた状況が挙げられた．また，関連する他の設問項目の自由記述から，動画活用と相互評価，学んだことをまとめ確認する取組，次時への目標設定などがこの成果につながった要因であると推察された．

2　課題

1）振り返りのカードの活用や振り返りの内容・方法の更なる充実

「②日頃から振り返りのカードを使って授業をしている」や，「④児童生徒が学んだことを整理したり，自分の考えをまとめなおしたりする時間を保障している」の項目はそれぞれ＋0.49，＋0.38ポイントと全体の平均値の伸びがみられたものの，２回目の平均値が3.00ポイント未満と十分に満足できる状況とは言えない．

自由記述では，振り返りのカードの活用や時間の確保，児童生徒が学びの振り返りを実感できる内容や方法の検討が指摘されていた．今後は，児童生徒の思考の流れを理解した上で，学びをまとめ積み重ねていく内容や方法などについて，児童生徒が自ら学びを振り返り，学びを次時につなげていく授業実践を重ねながら検討していく必要がある．

2）児童生徒の経験の差や障害特性に対応した振り返りの工夫

「⑥次の学習への意欲や見通しをもたせてから授業を締めくくっている」の項目は，全体の平均値で＋0.08ポイントと小幅な伸びで，有意差も確認されなかった．その要因として，１回目の数値がもともと高かったことが考えられるものの，自由記述から「振り返り」が次の目標設定や次の学習の見通しに十分につながっていない状況や，生徒の経験の差による影響が推察された．また，「⑤活動や振り返りの際に，学習の成果を見取り，価値付たり意味付けたりしている」に関する自由記述の中にも，言葉や文字による板書の振り返りよりも，即時評価や具体物による評価を積み重ねることが有効という意見があった．このように，児童生徒の経験の差や障害特性に対応した更なる振り返りの工夫が必要であると考えた．

Ⅴ　今後の課題

本研究は，知的障害特別支援学校における「振り返り」に焦点を当てた授業改善を行い，教員に対するアンケート調査を基にその成果と課題を検討した．今後は，「振り返り」において設定した個々の内容が，児童生徒の学びにどのように効果があったのか，授業実践に基づいた具体的な検討が求められよう．

文　献

中央教育審議会（2016）：幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（Retrived 2021.10.5）

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2019）：児童生徒の学習評価の在り方について（報告）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm（Retrived 2021.10.5）

文部科学省（2017）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）（平成29年告示）

文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）

文部科学省（2019）特別支援学校学習指導要領解説知的障害者各教科等編（高等部）

文部科学省（2020）：特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」特別支援学校学習指導要領

Akita University

学習評価参考資料
https://www.mext.go.jp/content/20200515-mxt_tokubetu01-1386427.pdf（Retrived 2021.10.5）
文部科学省初等中等教育局長通知（2019）：小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（改善等通知）
https://www.mext.go.jp/content/20200318-mxt_daigakuc02-000005730_12.pdf（Retrived 2021.10.5）
文部科学省：平成29・30・31年改訂学習指導要領周知・広報リーフレット
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/02/14/1413516_001_1.pdf（Retrived 2021.10.5）
太田正巳（2012）：知的障害の授業展開「まとめ」をすれば授業の効果が上がる－学習活動「見通し・振り返り」と評価－．ジアース教育新社，はじめに，27
臺　明子（2016）：知的障害のある児童の主体的に学ぶ意欲を高める振り返り活動の工夫－単元全体をつなぐ「振り返りファイル」の活用を通して－．広島県立教育センター．平成28年度教員長期研修（前期）
http://www.hiroshima-c.ed.jp/pdf/research/chouken/h28_zenki/zen22.pdf（Retrived 2021.10.5）

Summary

The purpose of this study was to implement the improvement of classes focused on reflection in a special needs school for students with intellectual disabilities, and to clarify the results of the improvement and issues. Four common practices were established toward the improvement of classes focused on reflection in the target schools, and a questionnaire survey was conducted of the teachers regarding the status of the implementation of these practices.

As a result, the consistency of the class objectives and reflection was achieved, and accordingly it has become possible to develop learning activities with a clear outlook. In addition, reflection by pupils and students has been enhanced through these, such as the use of videos, mutual evaluations, efforts to summarize and confirm what has been learned, and relating about the next class's objectives. The issues raised include considering the content and methods that enable students to reflect on their own learning and connect their learning to the next class, as well as devising ways to reflect depending on differences in experience and the characteristics of the disabilities of the students. In the future, specific studies based on classroom practices will be required to identify how the individual practices established in the reflection were effective for the learning of the students.

Key Words : Intellectual Disabilities, Special Needs schools, Reflection, Improvement of Classes

（Received January 6, 2022）